



MEL ニュース

(2019年2月 第11号)

(一社)・マリンエコラベル・ジャパン協議会
事務局

三寒四温ながら、春の足音が着実に高くなっているようです。全国的に漁模様はもう一つ不満が残るところですが、このニュースがお手元に送信される頃には、少しは落ち着いて欲しいと願っています。

日本は今月から様々なイベントが続きます。天皇陛下のご在位 30 周年のお祝から始まり、皇位継承へと続きます。前回のご不礼とは違い慶事ですから日本を明るくさせてくれることでしょう。

今月は MEL にとって発足以来最も多忙な月で、ご報告させていただくことが多くありました。

1. 理事会開催について

1月23日の規格委員会での審議を受けて、2月7日に理事会を開催しました。今回の議事は、管理運営規則他の規程類の一部改定、会員から頂いた寄附金の取扱いに関する件でした。また、規格委員会にて了承された規格関連文書の一部改修他の報告がありました。

議事については、基本了承となったものの、寄附金の取扱いについては、監事よりの指摘あり、事務局が再度法規（公益法人法）との整合性を確認することとなりました。

2. GSSI 申請関連

今月は GSSI の審査において、昨年 9 月の承認申請を一つ目の山場とすると、二つ目の山場になりました。即ち、GSSI の審査員 (Independent Expert : IE) 2 人を日本に招き、先のダラスにおける協議の詰めを漁業認証および養殖認証について 2 月 5 日に行い、その後 MEL ワークショップへの参加と出席者との交流、更に日本の漁業と養殖の現場への理解を深めるための視察や意見交換を実施しました。ガバナンスとスキーム管理及び CoC 認証は 2 月 18 日に、MEL 事務所審査を実施しました。また、翌 19 日には MEL の認証機関である日水資および認定機関である JAB の事務所を訪問し、MEL スキームのガバナンスとマネジメント体制が適切に機能していることの確認が行われました。審査員 3 人はいずれも GSSI の IE の中で

漁業、養殖、管理の各分野の代表をつとめ、過去にも多くスキームの審査に関わっている正にエキスパートであり、それだけに厳しい指摘がありました。

これらの結果が GSSI ベンチマーク報告書に反映され、次のステップであるベンチマーク委員会に提出されます。IE からは、MEL が作成した認証規格以下のスキーム文書は基本的に GSSI の要求事項に適合しているが、漁業認証（北海道漁連の秋サケ定置網漁業）の審査報告書については、書き方の様式について修正を要することが指摘されました。もちろん現場視察等を通じ、日本の漁業、養殖について信頼性への理解は高まりましたが、これから始まるベンチマーク委員会での審議とそれに続くパブコメへの対応は原則 IE が前面に立つこととなりますので、IE としてはどうしても解決をしておかなければならないポイントであります。また、この指摘は漁業の実態を報告書へ的確に反映させるための仕組みづくりが不十分であった MEL の責任ととらえ、今後の対応は北海道漁連様の理解を得ながら日水資と協力して知恵を絞ります。CoC に関しても、旧 MEL の時代からロゴマークの運用に記録不足が指摘されておりますが、何とかクリアします。

なお、審査機関である日水資の JAB 認定は約 1 カ月遅れで 2 月末には決定される見通しです。日水資の皆様の認定取得までの真摯な努力に敬意を表します。

2. 「日本のサステナブルな漁業・養殖と水産エコラベルの発展」のためのステークホルダー会合について

1 月 30 日に、水産庁企画課の発案で東京大学八木教室が主催して水産エコラベル推進に関わる関係者が一堂に集り、現状の報告と意見交換を行いました。一般公開されないクローズドな会議でしたが、行政からは水産庁企画課が、スキームオーナーからは MSC、ASC、MEL、ASMI、SCSA が、事業者側からはマルハニチロ、ニッスイ、極洋が、消費者側から日生協と多彩なメンバーが顔を揃え夫々の分野のプレゼンを行いました。

各セッションの持ち時間は短時間でしたが、登壇者の報告、会場からの質問を含め内容は充実したものでした。水産エコラベルが日本において根を下ろし始める前夜を予感しました。次は社会と消費者へのアプローチです。

3. GSSI 事務局長および審査員 (IE) の現場見学および打ち合わせ

GSSI 事務局長と IE の現場見学および打ち合わせに関する特記事項は次の通りです。2 月 7 日から 9 日にかけて、GSSI 事務局長と IE に加え東京海洋大学の舞田教授が鹿児島県にある陸上・海面双方の養殖施設や研究機関を見学するとともに、現場の方々との意見交換を行いました。MEL からは田村部長が同行しました。

特に、MEL 養殖認証第一号である東町漁協を訪問した際には、ブリの養殖から加工、出荷にいたる一連の流れに加え、漁協で保管されている各事業者の膨大な記録

等、高い技術と適切な管理の実態を IE に目の当たりにしてもらうことが出来た。また、これまで懸念となっていたモイストペレットの使用については、クリアされました。更に、IE は 130 の事業者を漁協による同一管理の下でグループ認証するという方法に大変興味を持つとともに、各事業者が同じ方向を向いていることに感銘を受けた様です。IE が住んでいるアメリカでは、個々の事業者による売り上げ競争の結果、既に漁協が消滅した地域も見られるということで、日本の特徴的な水産業



東町にて、ブリへの給餌を視察する、GSSI 養殖専門家

や資源の共同管理のあり方について理解を深めていただくことが出来たと受け止めています。

4. MEL ワークショップ開催について

2月6日に「日本発世界に認められる水産エコラベルの挑戦と課題」をテーマに MEL のワークショップを開催しました。

当初 100 名の参加を想定し準備を進めましたが、結局 170 名超（関係者を入れると 200 名）のご出席をいただく盛会となりました。水産庁からは山口次長以下幹部に皆様が終了まで参加され、山口次長には登壇いただきました。

横浜国立大学の松田裕之教授に基調講演と座長をお願いし、MEL および GSSI から基本的な考え方と現状の説明、北海道漁連から MEL 漁業認証、東町漁協から MEL 養殖認証の取組み事例を、GSSI の IE の 2 人から夫々漁業、養殖につき海外の事例の紹介があり、ディスカッションでは会場からのご意見をベースに生産から流通、消費まで幅広い意見交換がされました。会議終了後に交流会を開催いたしましたが、活発な議論があちこちで盛り上がっておりました。当日の内容は MEL の HP に掲載する予定ですが、取り急ぎ要点をご報告します。

- ① 出席者の属性は実に多彩でした。事業者・水産関係団体が最多の 43%、続いて研究・教育が 12%、小売・外食が 11%、他のスキームオーナーと NGO・NPO が 8%、コンサルタントが 7%、行政 7%、メディアが 6%、認定機関・認証機関が 5%、他(金融等)1%でした。各地の行政から、また漁連・漁協から、そして何より小売・外食から多く参加いただいたことは水産エコラベルの明日にとって意味あることと受けとめました。
- ②出席者のアンケートにおいては、有効回収率 60%で、MEL および GSSI への

好意的な受け止めをいただく半面、MELのスキーム運営に透明性の点で厳しい指摘もありました。ワークショップ運営に関しては、各発表の時間が短すぎよく理解が出来なかったとのご意見を多くいただきました。貴重なご意見を今後
に生かして参ります。

③今回のワークショップを通して、座長の松田教授から日本の水産業の持続可能性へのポジティブな考えの示唆とともに、「認証制度は、取得が目的ではなく持続可能な水産業実現のための手段であり、旧 MEL と新 MEL あるいは MSC、ASC 等とのスキーム間考え方や基準の違いを追求するものではない。時とともに進化し、改善を重ねながら世界的な持続可能性の輪を広げてゆくことが重要である。また GSSI としては東京オリパラの選手村で使用される食材が MSC、ASC だけでなく多様化されることを歓迎する」と総括されました。MEL にとってはまだまだ課題はありますが一つひとつ丁寧に対応を続けます。

**国際標準のエコラベルへ
MEL ワorkshop ショップ開催
海外の専門家と議論**



「国際標準のエコラベルへ MEL ワorkshop ショップ開催 海外の専門家と議論」の開催風景が写っています。会場には多くの参加者がおり、真剣な表情で話を聞いている様子が見えます。

（資料：水産経済新聞）

また、会場の様子をビデオに撮らせていただきました。MELの活動の紹介とともに、認証取得事業者の取り組み事例として東町のブリの養殖現場の映像と合わせて MELのHPに動画として載せる予定です。

ご出席いただきました皆様、ご登壇いただいた方々、またご協力いただいた関係者に心よりお礼申し上げます。

5. MEL 認証取得のための講習会

今月の講習会は、8日の石川県（金沢）、14日の三重県（伊勢）、20日の大阪府（シーフードショー大阪の会場）で実施しました。どの会場も、ここへきて事業者の皆様の新 MEL 認証取得の機運が高まっており、質問を含め内容の濃い会が続きました。行政の皆様の取り組み姿勢が前向きになっていることが、全体を引っ張っていると感じました。参加者も各会場 30 名前後となっており当初とは様変わりしております。事業者のレベルでは、水産エコラベルが自分には関係のない制度と考えていたものがにわかに身近になった。殊に三重県の会場では、的矢産のカキがシンガポールに輸出されることが決まった直後であり、更に MEL の養殖認証が取れば一段と信頼性が増すのではと大いに期待が膨らみました。

26日には愛媛県（宇和島）で開催の予定です。タイの養殖が盛んな地域だけに、これから続くビッグイベントに欠くことのできない食材として、認証取得が盛り上

がるのではないかと思います。

6. MEL 新規格による認証と認証証明書授与式

MEL の新規格による認証は、既にご報告の通り、11月の東町漁協様ブリ養殖および CoC（新規）、12月の北海道漁連様の秋サケ定置網漁業（新規）、2月の由比港漁協・大井川港漁協様のサクラエビ2そう船引き網漁業（新規格への移行）、（株）ヨンキュウ様のマダイ種苗陸上養殖（新規）、中央魚類（株）様の CoC（新規）、中部水産（株）様の CoC（新規）の審査が終了しました。

認証証明書授与式は、3月6日に三会堂ビル会議室で行われる予定です。授与式の模様は、新 MEL として初めての授与式であり、報道等にも公開します。

なお、由比港漁協・大井川港漁協様のサクラエビは2月の資源調査では認証に至らず（対象資源の持続可能性の原則に照らして）、3月末に予定される商業漁獲開始時のデータを見て最終決定がされる予定です。

現在日水資が審査の申請書を受理している案件が24件あり、これから認証ラッシュが続くことが予想されます。

7. MEL 新規審査員養成のための講習会

MEL のスキーム運営の重要な要素でもあり、29年度の補助事業の一貫として昨年3月より検討会を重ね、カリキュラムの構成や講師陣、講義内容、判定試験の作成などに取り組んできました新規審査員講習会がようやく実施されることになりました。

内容は、主催者である大日本水産会の HP に掲載されており、すでに受講者の募集も終了し、最終準備に入っています。

概略は以下のとおりですが、詳しくお知りになりたい方は HP をご覧下さい。

（MEL 協議会、研修実施機関の日本水産資源保護協会それぞれの HP からご覧いただけます。）

①コース（漁業と CoC のセット）

日程：3月5日（火）～7日（木）、会場：大日本水産会会議室

②コース（養殖と CoC のセット）

日程：3月12日（火）～14日（木）、会場：赤坂インターシティーエアー

①コースは24名、②コースは28名の申し込みをいただいております。有償の研修会にもかかわらず、審査員への関心の高さが伺えます。また、準備中の審査機関複数化への第一歩となることを期待しております。

8. イベントへの参加

今月はシーフードショー大阪に出展しました。今年のシーフードショー大阪は

期間中大変な人気で会場は混み込みの状態でした。出展者の積極的な仕掛けと来場者へのアピールがお客様を惹きついているように感じました。

MELは水産エコラベルの近況のご報告と、認証取得事業者である、焼津の高橋商店様の一本釣りカツオと下田の宇都宮水産様のキンメダイの試食を行いました。ブースに立ち寄っていただいたあるスーパーのバイヤー様から、ぜひCoC認証を取得して積極的にMELのロゴマークのついた商品を取り扱いたいので、経営者への口添えを要請されました。早速に社長にご連絡をし、社内で検討いただけることになりました。

来月は、いよいよBoston Seafood showに挑戦し、MELの活動の海外への発信にも取り組みます。

MELのロゴマーク付きの商品のマーケットでの露出が極めて少ないことを指摘されており、日本冷凍食品協会様、日本缶詰・瓶詰・レトルト食品協会様と加工品へのMELロゴマークの貼付をご相談しております。先ず漁業者、養殖事業者の皆様へに認証を取得して頂き、認証された原料をCoC認証を取得した加工事業者が加工しその製品にMELのロゴマークが付けられ店頭化される、そんな産業の循環を作りあげていくことを模索しております。

皆様と一緒に水産エコラベルの裾野が広げられることを願っております。

以上